

第22回プロ音楽録音賞 2015 ハイレゾリューション部門
「マルチチャンネル・サラウンド」優秀賞 受賞 記念特別版

The Art of Fugue Premium について

UNAMAS レーベル Mick Sawaguchi



The Art of Fugue BWV-1080 Premium ver.(左)、同 HPL 版 (右)

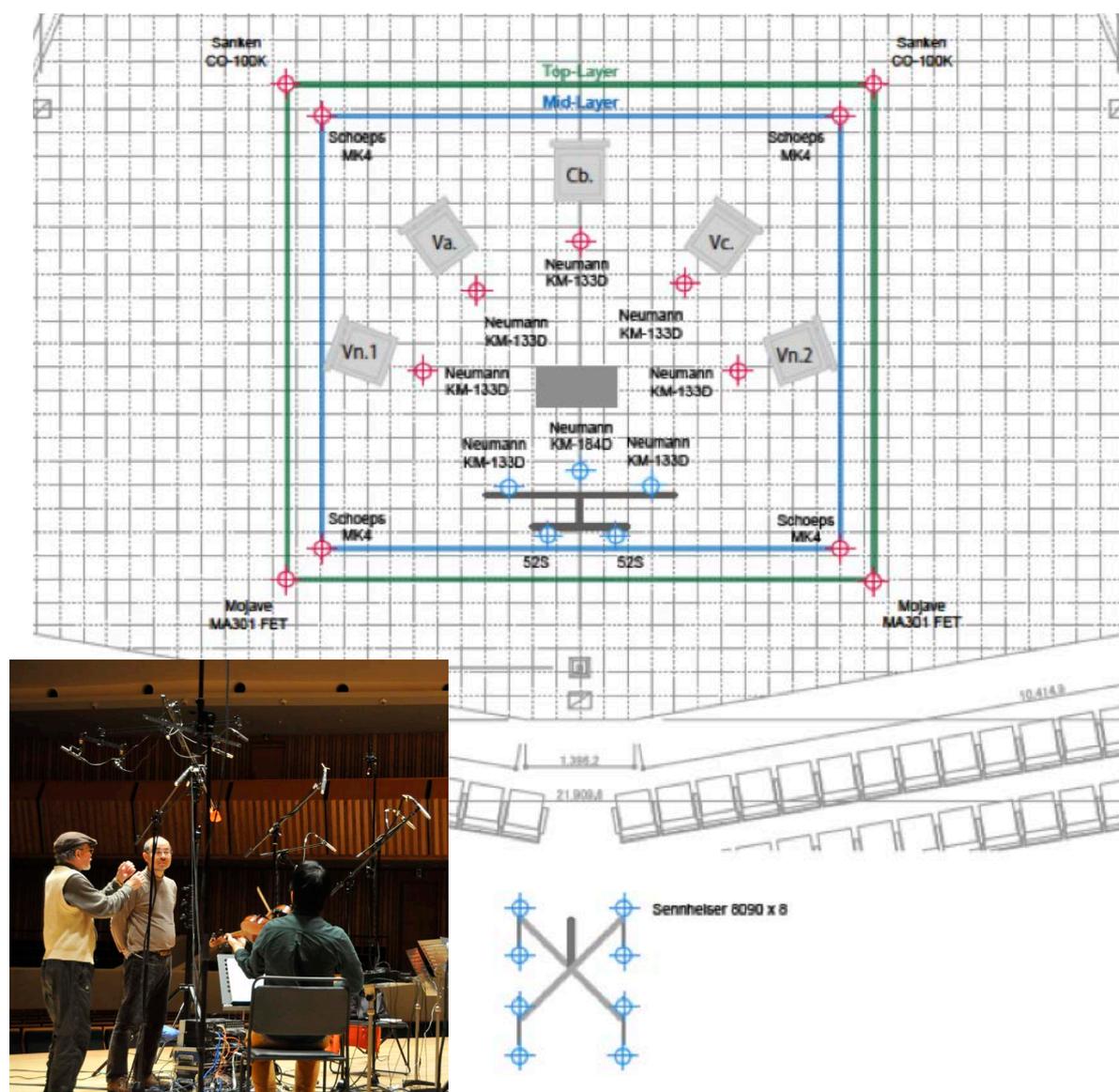
本作は、軽井沢大賀ホールシリーズの2作目として2015年2月に録音し、6月以降2ch/5ch/9ch HPLの各フォーマットでリリースしています。この度の受賞を記念してボーナストラック5曲を追加したPremium版をリリースします。

本作の特徴を技術面からみると、メインマイクにUNAMASレーベルとして初めてデジタルマイクを使用しています。またハイト・チャンネルを加えた9chマスターのために2つの異なる録音方式によりレコーディングを行いました。今回は、デジタルマイクの解像度の高さと2方式の録音を持つ表現の特徴を楽しんでいただきたいと思います。



音楽の表現方法には、コンサートの演奏を忠実に再現しようという写実的なアプローチと、その音楽とアーティストの演奏をどのようにサウンドとして表現するのが良いかを判断しながら制作する、録音芸術という方法があります。絵画や写真、文学などは、素材に忠実な写実派から、現在は、表現者による様々な様式が发展しています。音楽表現についてもそうした多様性を追求できるのが「録音芸術」だと思います。その実現のためには、音楽にふさわしいホールやスタジオ、音楽を最大に表現できるアーティスト、そしてそれをどう音場というキャンバスに描くか、という制作者のゴールデン・トライアングルの実現がキーとなります。

本作では、下図に見られるような2タイプのマイクアレンジを行っています。



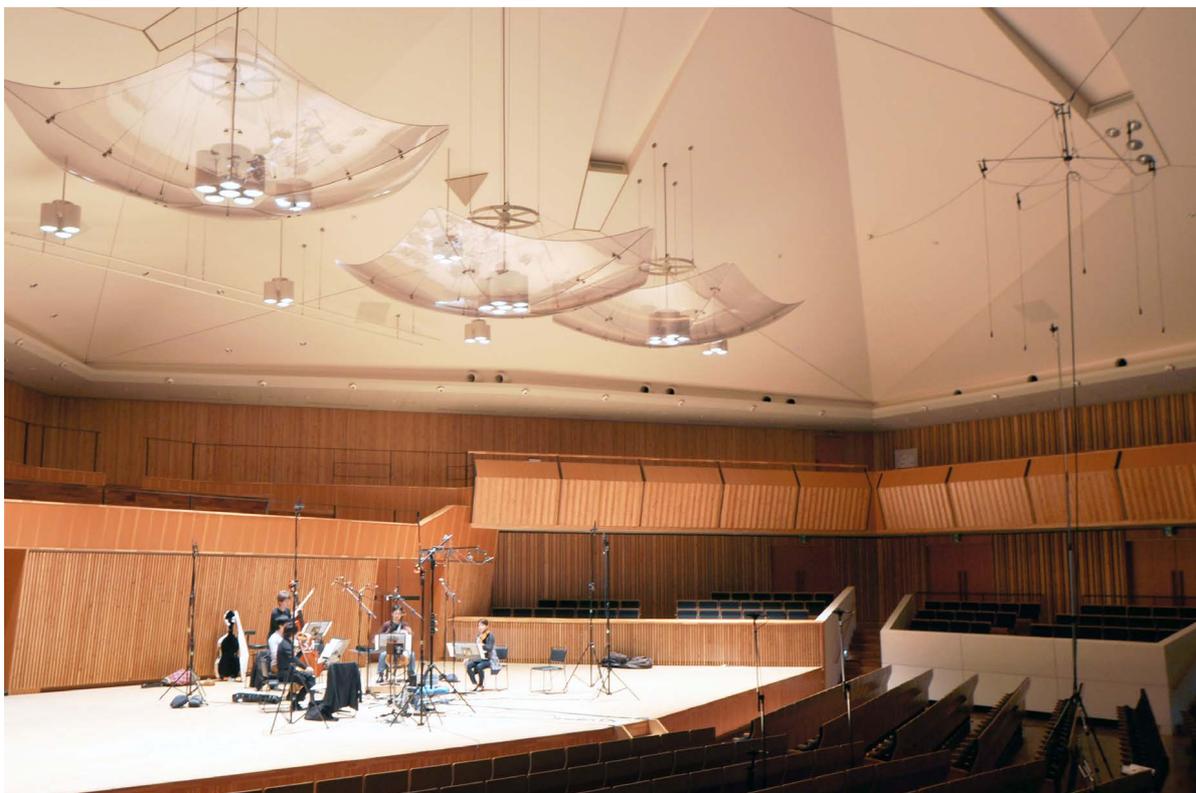
「主観的サラウンド」

5人のアーティストがサラウンド空間でリスナーを取り囲むような配置で、加えてホールの初期反射音を多く取り入れた音場表現を意図しており、これを「主観的サラウンド」と呼んでいます。(図では赤マークのアレンジ)

「客観的サラウンド」

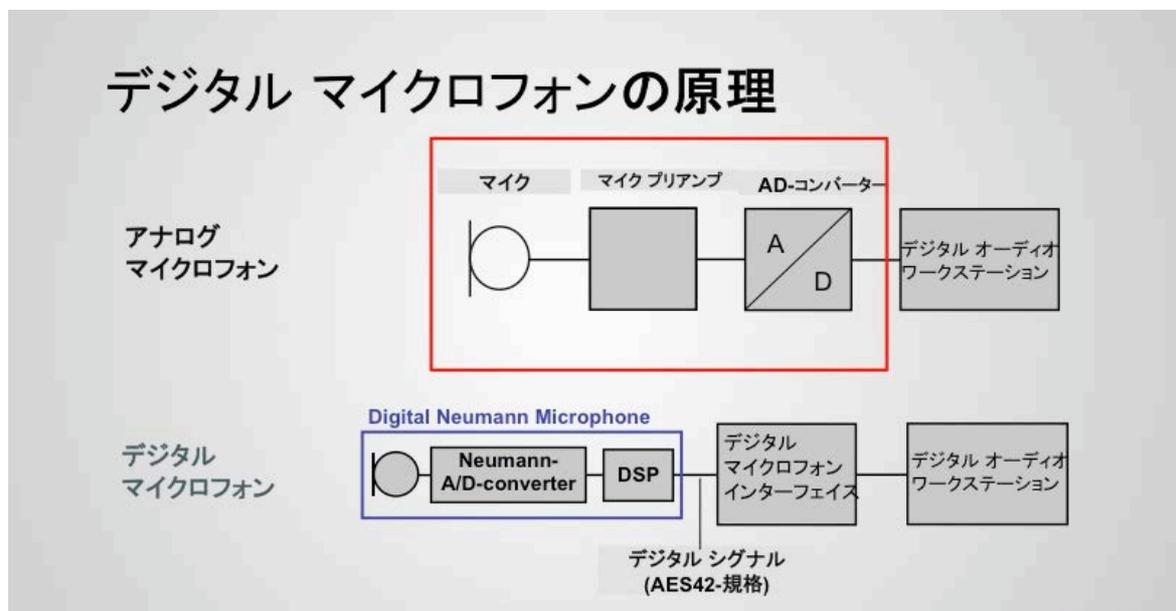
もうひとつは、本作でレコーディング・ディレクターを担当した入交氏の提唱している 9ch マイク方式で、メインの 5ch は、Decca 方式と呼ばれるアレンジです。これに加えて大賀ホールの豊かな響きを捕らえるためのハイト ch マイクが 2 段階（2 レイヤー）に組み合わせられています（図では、青マークのマイクアレンジ）。この特徴は、リスナーのみなさんがホールのベストシートで演奏を味わえることを意図した方式で、RE-mix M-01～ 05 でその音場を聞くことができます。

大賀ホールという空間と UNAMAS Fugue Quintet の同じ演奏が、制作者のキャンバスの描き方でも変化するという「録音芸術」をお楽しみください。



本作の特徴である「デジタルマイク」についても紹介します。

音の入り口にあたるマイクをマイクカプセルの振動板直後から A/D 変換して伝送しようというのがデジタルマイクの実現方法です。これまでの名機といわれるアナログマイクに比べて、どんな特徴があるのでしょうか。



図に示したのが従来のマイクから DAW 録音機までの信号の流れと、デジタルマイクの信号の流れです。両者の大きな相違は、従来のアナログマイクでは、マイクのアナログ出力信号をアナログケーブルで伝送し、受け側に設置したマイクプリアンプで適正ゲインに調整した後で、A/D 変換し DAW 録音機へ送るという流れに対して、デジタルマイクは、マイクカプセルに直結した A/D コンバーター + DSP 回路の出力が AES-42 というデジタル信号として伝送され、それがデジタルマイク専用マイクプリを経由して DAW へ記録される事です。

この方式の特徴は、カプセル直後で A/D 変換することで解像度の高い信号を得られるため、空気減衰の影響が大きいホール録音などで、大きなメリットとなります。A/D 変換で生じる遅延は、サンプリング周波数により 0.5msec ~ 2msec となり、得られるダイナミックレンジは 130dB です。

